

## 1 4 驅瘀血劑

### 定 義

瘀血を治療する方劑を驅瘀血劑と稱している。

### 瘀血の概念

血液は飲食物より脾が運化（吸収消化）した津液と水穀の精微が肺に運ばれ、血脈の中で營気の働きにより赤変して血と化したものである（『靈樞』營衛生會篇第十八）。人は五臟六腑、四肢、九竅、肌肉、精神活動に至る迄、総て血液が運んでくる栄養分によってその生理機能を維持している。

体内で血液が停積して円滑に流通できなくなった病態が瘀血である。『傷寒論』にも己に瘀血の一証である「蓄血」の証治についての記述（桃核承氣湯、抵当湯、抵当丸などの諸証）が見られ、また『金匱要略』婦人妊娠病篇にも瘀血を表現する衄（はい、この語は『靈樞』水脹篇第五十七で停留した血液の意に用いられている）という語が出ている（桂枝茯苓丸証）。従って瘀血の概念は内経、傷寒金匱の時代から存在したものである。

### 瘀血の原因

#### 1、氣の異常

氣と血は共に水穀の精微より化生したもので、両者の源は同じであるが、互いにその性質と作用は異なっている。氣は血を生じこれを推動して巡らせる一方、氣の働きは血が運んでくる栄養分によって補充されて始めて持続できる。即ち「氣ハ血ノ帥」であると共に「血ハ氣ノ母」である。

氣虚や氣滯などの氣の異常が生じると円滑な血流が阻害され瘀血を生じる。

#### 2、寒凝

『素問』調經論篇第六十二には「血氣ハ温ヲ喜ビ寒ヲ惡ム。寒スレバ則チ泣リテ流ルルコト能ワズ、温スレバ則チ消シテコレヲ去ル」とある。

寒冷の環境下、或は強い内寒があれば気血は凝滞して瘀血を生じ、温めると消散して好く流通するようになる。

### 3、血熱

『傷寒論』には太陽病（腑証）下焦蓄血の証（桃核承氣湯証他）がある。血熱があると血は津液を失い乾燥し粘稠となって流れにくくなる。

### 4、外傷

『靈樞』賊風篇第五十八に「墮墜スル所有リテ悪血内ニ在リテ去ラズ」とある。打撲や外傷があると炎症性鬱血が生じる。外傷性の浮腫や皮下出血、全身打撲による諸証、或は鞭打ち症等の病理機序は総て瘀血である。

### 5、出血

「離經ノ血」即ち血管から漏出した血液は気によって動かされている血ではなく、いわば死血、敗血である。従ってこれは瘀血の一種と考えられる。

### 6、久病は瘀血を生ず

外感病と内傷を問わず、気血水（津液）の異常或は陰陽の不和、あるいは原因は何であれ疾病が長く持続すると、血液の循環は正常円滑に行われなくなり、最終的には瘀血を伴うようになる。

#### 瘀血の症状

『諸病源候論』卷三十六「卒ニ瘀血ニ被損スルノ候」に「夫レ瘀血有ル者ハ、其ノ人喜忘レ物声ヲ聞クヲ欲セズ、病人腹満シ唇萎エ、舌青ク口燥キ、タダ水ヲ漱グコトヲ欲シテ咽ムヲ欲セズ。熱無ク脈微大ニシテ来ルコト遅シ。満腹セザルニ其ノ人我腹満スト言ウハ瘀血有リト為ス。汗当ニ出ズベクシテ出デザルハ内ニ結ス。亦瘀為リ。病人胸満口燥シ體シテ渴シ寒熱無キハ瘀血有リト為ス。腹満口燥シテ渴セズ、唾漿状ノ如キハ此レ留血有ル爾」と瘀血の症状を要約している。

炎症による血管の変化、動脈硬化性病変、血液凝固因子の亢進、鬱血、多血症、或は婦人の月経、妊娠、出産等に伴う諸病変は総

て瘀血の病症である。

1、皮膚、粘膜、爪甲の暗赤色化。皮膚がかさつき（肌膚甲錯）  
静脈の怒張や蛇行、毛細血管拡張、紅斑などが現れる。

2、皮下出血、溢血、血便、血尿、不正性器出血などの出血が  
現れ易い。

3、頭痛、頭重、肩こり、不眠、嗜眠、動悸など不定の症状。

4、のぼせ、顔色が赤黒い、目が充血し易い。

5、発熱、熱型は一定しないが、夕方から夜にかけて微熱を發  
する例が多い。

6、冷えのぼせ。冷えを訴えたり熱感や火照りを訴えたりする。  
寒熱が混在錯雑することが多い。

7、瘀血のある部分に固定性の鋭い痛みを感じることもある。  
臨床的にはバージャー病の四肢の痛みや、虚血性心疾患の患者の  
胸痛などは瘀血によるものと考えられる。

8、下腹が脹満した感じや便秘、子宮筋腫などの腹中の良性的  
腫塊は多く瘀血によるものとする。

9、少腹硬満や少腹急結など、瘀血に特有の腹証を呈する。

10、口唇、歯齦、舌質は暗紅で、よく紫斑を見る。舌下静脈の  
怒張や毛細血管の拡張が著明である。

11、脈象に対する定説はないが、沈澁（滯）の脈を現す者が多  
いようである。

### **桃核承氣湯**（漢方常用処方解説272参照）

組 成

桃仁、桂枝、大黃、芒硝、甘草。

病 態

太陽病が解さず、表の鬱熱は太陽膀胱経脈を伝って下焦に至り、  
膀胱を犯し、その氣化作用を障害すれば、熱と水とが結合して小  
便不利となり五苓散証を現す。下焦に達した熱がさらに深達し、  
手太陽経脈の府である小腸の血と結ばれると、実熱と瘀血により